2019.3.7.
T.Kobayashi

少し深入り　ひたちなか
～珍しい地名の由来を探ってみる～

## はじめに

1 月末に「ひたちなか海浜鉄道湊線」の車窓の旅を体験してきた。その時に地図を眺めていたら、興味深い地名が沢山並んでいることに気がついた。この地名には何か訳がありそうだ、この地名の由来はどんなことなのだろう、と心動かされ、「ひたちなか市の町名」を洗い出すことになってしまった。暇を見つけては調べまくり、調べた物はメモをして・・・・忙しい 1 ヶ月になった。

◆十三奉行（じゅうさんぶぎょう）https://yahoo.jp/6Mv9X0
八幡太郎義家の蝦夷（えみし）征伐に関係している地名。
蝦夷に内通していると言われる 13 人の役人が八幡太郎義家により打ち首にされたという言い伝え。
源義家は 1039 年（長暦 3 年）に生まれて 1106 年（嘉承元年）に歿。
八幡太郎伝説には血なまぐさいものが少なくない。蝦夷征伐に際して、軍勢を引き連れて遠征の途中で地元の長者の屋敷の世話になる。長者の盛んなもてなしを受けて旅立つのだが、「このような富裕な長者を生かしておくことは後々のためにならぬ」として、帰還するやこの屋敷を焼き払ってしまった。
という伝説的昔話が県下にいくつもあるらしいし、中には八幡太郎義家の軍団をお泊めしたが、何事もおきなかったとする伝説まであるらしい。

◆足崎（たらざき）https://yahoo.jp/IOz1iZ
中世には多良崎と言われたが、太郎崎とも言ったらしい。「たろうざき→たらざき」の変異の中で、「足崎」という文字があてられたと言われているが・・・・。
多良崎・太郎崎と名が付くからには「海に面した岬の地名」を思い浮かべるのだが、この地は海岸線からはるばる 4～5ｋｍ、海抜 31ｍほどの高さ、およそ海とは無縁な場所のようだが。

◆馬渡（まわたり）https://yahoo.jp/xHnkvLz
川が二股になっていて、八幡太郎義家が奥州へ出陣するときに隊列をなして川を渡ったことからこの地名が付いたと言う伝承が残されている。全国に点在する「馬渡（まわたし）」「馬渡（まわたり）」の地名は、殆どが「馬を引いて川を渡る」地点に付けられているようである。しかし、ひたちなか海浜公園の西側にある馬渡には川が流れてはいない。

◆田彦（たびこ）https://yahoo.jp/QZAW7n
「猿田彦」が起源という説と、「旅まわりの少年芸人」を意味する「旅子」が起源という説とがあるらしい。歴史を遡ると、このあたりには旅子を輩出したことがあるようではあるが、旅子は男色の相手をしていた存在でもあり、どちらかと言えば地名として残すような名誉な存在であったとは思えないが･･･。

◆はしかべ　https://yahoo.jp/ELfD6L
近頃珍しくなくなった「ひらがなの地名」。元の名は「端河辺」だったようだが、ひらがなにすべき理由がわからない。漢字で書けば周囲の景色を思い浮かべることも出来る。
しかし、現在の地形図で確かめてみると、常磐線の勝田駅と佐和駅の中間にある自衛隊の基地の西南の縁にこの町がある。川からは遠く離れた場所で「河辺」を感じさせる地形は見当たらない。自衛隊の基地が出来る前には川が流れていたのだろうか。
私見だが、このひらがな地名の羅列は救いがたい。余計なお世話かもしれないが、「ひたちなか市はしかべ」と住所を書くのは恥ずかしくないのだろうか。

◆部田野（へたの）　https://yahoo.jp/f5Sfhq　和尚塚（おしょうづか）https://yahoo.jp/hzM7g3
幕末の頃に、水戸藩の尊王攘夷派が多くの武士や農民を動員して様々な事件を巻き起こす「水戸天狗党事件」。保守派の諸生党との対立が激化して過激な事件の繰り返しに発展し、各地で戦いが行われた。
やがて京をめざす動きにまで至るが、越前の雪の山中で降伏することになる。

ひたちなか海浜鉄道の平磯駅・殿山駅から程近い場所にある和尚塚、さらに北西に入った部田野あたりが戦場になったらしい。
和名抄によると、大化の改新後常陸国には 22 の郷があり、現在の那珂湊周辺には幡多郷・岡田郷があった。幡多郷には現在の平磯・阿字ヶ浦・部田野・湊などが含まれており、部田野は中世の資料の上では戸田野と記されていたらしい。
各地に存在する「辺田（へんだ)」、「辺田（へた)」などと同類項なのかもしれない。
◆長砂　https://yahoo.jp/Ag-6Z6　小砂町　https://yahoo.jp/FwV_4s
国営ひたち海浜公園の西側に、「長砂」という地名がある。海浜公園を挟んで東側には太平洋が広がる。1938 年に水戸陸軍飛行学校・大日本帝国陸軍飛行場などができ軍国日本の象徴たるような所だった。戦後米軍水戸射爆場となり、1973 年米軍からの返還後に造成されて巨大な公園が誕生した。このような観光名所を作ることによって、皮肉なことに「軍国の香り」が除去された町になってしまったのかもしれない。
茨城県の海辺には、その昔砂塵嵐が吹き荒れて被害が出たり、人が住まなくなった所もあったようなので、このあたりは砂丘地帯だったのかもしれない。
勝田駅の東側には「小砂」という地名がある。二つの川に挟まれた海抜 20mほどの小さな丘のようなところ。ここは砂丘とは関係ないだろうと見たが・・・。
◆名平洞（なへいどう・なへど）https://yahoo.jp/M5oSac
那珂湊駅の北方に「名平洞」という大きな湖沼があり、その名前が気になって調べてみた。
文政年間に作られた農業用水用の溜池で、水守の斉藤名平にちなんでこの名が付けられた。
那珂台地の南端の浸食谷を土砂でせき止めて作った溜池で、当初は東西に二つの池があったが、東洞が干拓されたため西側だけが「名平洞」として残った。歴史を語る資料を探ってみたら、この辺りには「名平山」という山があって、この山の懐の浸食谷をせき止めて作ったものらしいこともわかった。
そんなことが解ってから改めて周辺の地図を眺め回していると、色々なことが見えてきた。
名平洞の南には「洞下町」という地名があり、東側には「狢谷津」「船窪」「鍛冶屋窪」など山裾の谷津を思わせる地名が点在している。山が削り取られて平地化しているが、地名だけが残っているようで、地名が貴重な語り部になっている。
名平洞の北側に「四十発句」という変った地名があり、松尾芭蕉とでも関係があるのだろうかと勝手に想像して調べてみたが、由来が解らなかった。
名平洞の南西に、やや低めながら底面の広い山地には「館山」という町名がついている。その昔「館山」という山だったのかもしれない。山中には浄光寺・常教寺・光泉寺・専光寺・専照寺・正徳寺・清心寺の浄土真宗本願寺派の七寺が建っており、その周りには墓地が連綿と広がっている。堂宇が立ち並ぶ山ゆえに「館山」の名がついたのか。

## おわりに

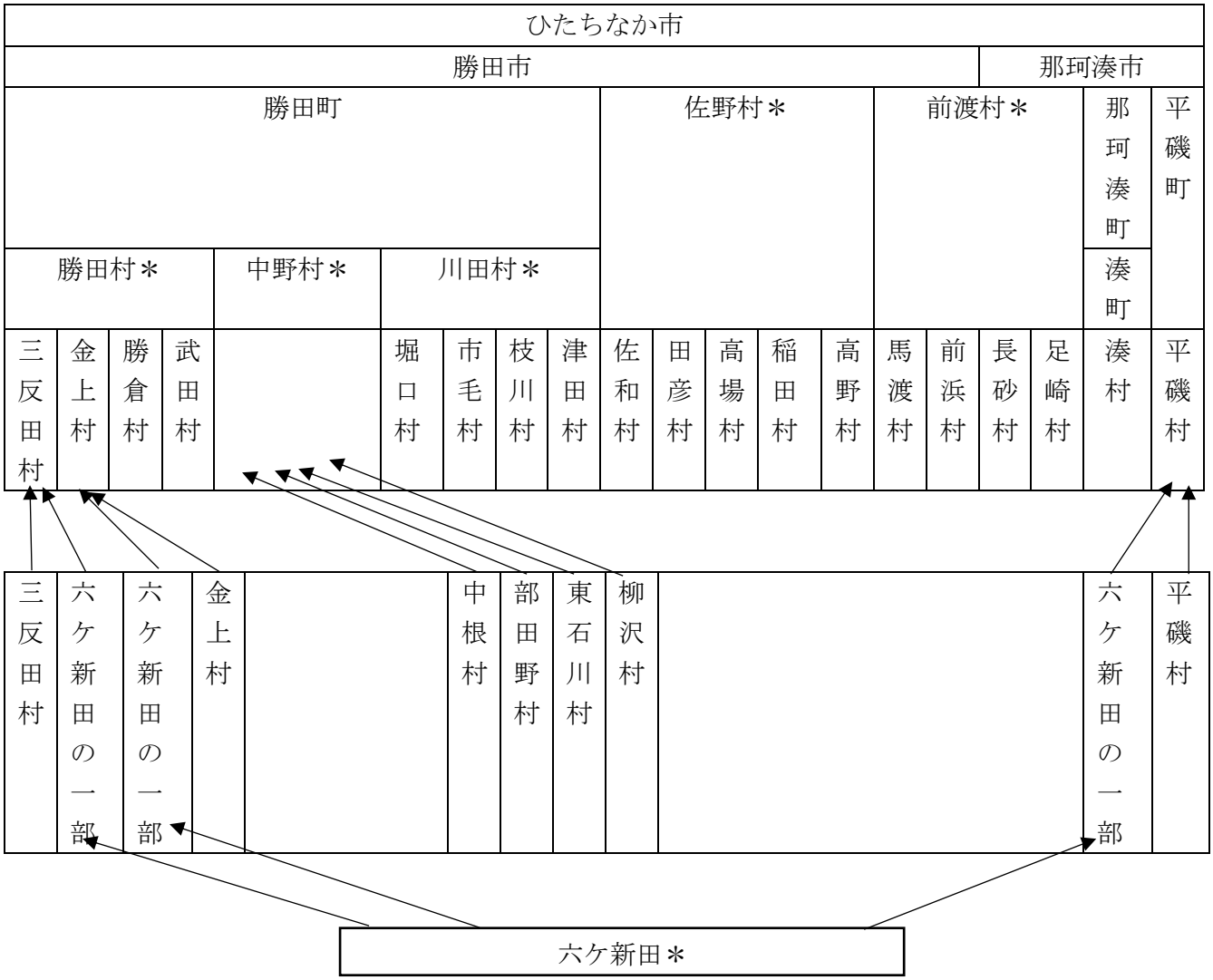
冒頭記したように興味深い地名は山ほどあり、インターネット上の情報や図書館で関係図書を閲覧したり手を尽くしたのだが、思ったほどには解決しなかった。
その背景には市町村合併の歴史が関係しているように感じられた。地名は地形やその土地の歴史を語っているものが多いのだが、合併の時に消滅するものもあれば、思いも寄らぬ新しい市町村名が付けられてしまうことにより、歴史の連続性が途絶えてしまうこともある。おまけに、公文書が適切に保存・保管されていないことや、無秩序に改ざんや廃棄が公然と行われている国なので心配の種は絶えない。
昨今、地名からその土地の歴史や特性を読み取り、天災への対応の一助にするという考え方がしばしば語られるが、長い歴史の中で変化したり消滅したりすることにより用を成さなくなってしまうこともあるに違いない。

以上

＜参考情報＞

ひたちなか市の成り立ち（町村合併の経緯）

どのような町村合併の結果「ひたちなか市」が誕生したのか。
最上段は現況、下段へ進むに従って歴史を遡る。
最下段の旧村名が、現在の町名や字地名として残っているようだが、




＜Appendix＞
＊勝田村＝村の合併の時に、勝倉村と武田村の一文字ずつをとって新しい村名にした。
＊川田村＝同上　　枝川村と津田村の一文字ずつをとって新しい村名にした。
＊佐野村＝同上　　佐和村と高野村の一文字ずつをとって新しい村名にした。
＊前渡村＝同上　　前浜村と馬渡村の一文字ずつをとって新しい村名にした。
＊中野村＝同上　　中根村と部田野村の一文字ずつをとって新しい村名にした。
＊六ケ新田＝天保年間に、六ケ村（中根・金上・三反田・柳沢・馬渡・平磯）が連接で荒野を開墾し、その地に「六ケ新田」と名付けた。開墾後に分村した。

◆現在のひたちなか市の地図はこちらから　https://yahoo.jp/tBDF8g1
（拡大すると地名が確認できます）